

DV 加害者から逃げられない被害者の心理

1200437 小夏 真慈

高知工科大学 経済・マネジメント学群

第1章 はじめに

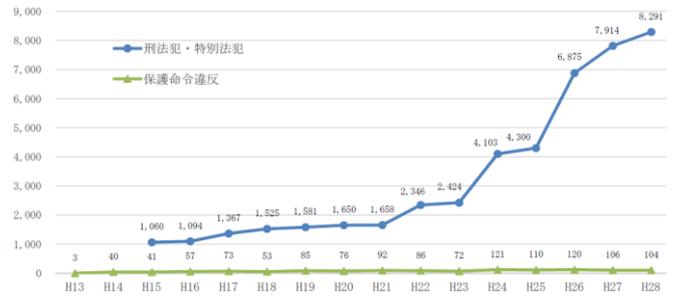
本研究のテーマとその目的

本研究のテーマは「DV（ドメスティック・バイオレンス）の加害者から逃げられない被害者側の心理」について検討することである。具体的には、DV を受け続けてもなお、加害者が改心してくれると期待する被害者、あるいは加害者の為に変わろうとして加害者から離れようとしなない被害者の心理を探ることである。近年、DV 関連の事件をニュース等で目にする機会が増え、身近な問題になりつつある。ここで加害者側の要因については社会的にも多くの議論があるものの（例えば自分に自信がない、過去に親から虐待を受けていたなど）、被害者心理については表面化（個人の特定）し難いという側面も相まって、未だ検討の余地があると考えられる。こうした背景を踏まえ、本研究では被害者側の心理に焦点を当て、DV の問題について検討することを目的とする。

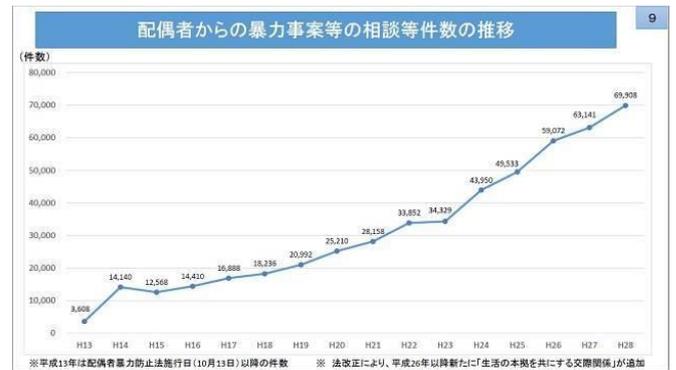
第2章 背景と研究仮説の導入

2-1 背景

DV に関する法規制の始まりは「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」（平成 13 年）であり、当該法律は平成 16 年、19 年、26 年と法改正され、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」（通称 DV 防止法）が施行され現在に至る。DV に関する法律が施行されたことにより、世の中に DV というものが認知され始め、これに伴って社会において問題意識が年々高まっている。ニュースなどで今まで認知されなかった、あるいは問題になりづらかった暴力等が表沙汰になり、身近な問題として捉えられるようになった。このような背景から、DV 相談数、検挙数ともに毎年増え続けている（図 1 及び 2 参照）。



(図 1) ※出典：警察庁「平成 30 年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について（詳細）」



(図 2) ※出典：警察庁「平成 30 年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について（詳細）」

デート DV の実態について、例えば神戸市における高校生の男女共同参画と男女間暴力に関するアンケート調査報告書（神戸市内の全日制公立高校に在籍する高校生 2697 名が質問紙により回答、平成 19 年 10 月から 12 月実施、男女比、ほぼ同じ）によると、これまで（現在も含む）交際している人がいた（全体の 44.6%）人のうち暴力にあたるいずれかの行為をされた経験があるのは 33.6%であった。また、暴力にあたる行為があることを理由に交際をやめた人はそのうち 3 分の 1 にのぼり、女性は半数が、また男性は 4 人に 1 人が誰かに相談しており、その相談相手は友人がほとんどである。

また横浜市の若年層におけるデート DV の実態調査結果からも高校生、大学生では女性の 4 人に 1 人の割合でデート

DV 被害を受け、交際しているカップルの 3 組に 1 組の割合でデート DV が起こっているとの指摘もある（藤田、米澤、2009）。

ドメスティック・バイオレンス（domestic violence：DV）には明確な定義はないものの、一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振られる暴力」という意味で使用されることが多い（内閣府 2013）。多くの学生が「暴力」に対して未だ明確なイメージを確立できていないことが窺える。また、デート DV における相手に対する暴力について、一部の若者は「特殊な性癖によるものである。」との認識を持っていることが明らかになっている（山下、2009）。

ここで、恋愛感情が原因による危害の発生を防止することを目的とした「ストーカー行為規制法」による「警告」や「禁止命令」は被害者の申し立てではなく、事件を担当する警察の判断による（山下、2009）。しかし、DV 被害者は、暴力を受けても、結婚に対する、本人の様々な価値観や考え、また夫に対する願望、期待などにより、暴力による恐怖心や不安感を否認し、生活を維持する方向に、自ら努力する過程を生じさせることが明らかとなっている。さらに本人の考え方の変化がない間は、夫から離れるのではなく、接近する方向で努力が続けられる（米田、2014）。

これらから、自分が DV を受けていると認識しづらい、または認めたくないという心理が働くことが理解できる。本人が DV と認めなければ第三者からはさらに認識しづらくなると思われる。このような現状を打破するには被害者側の心理を理解し被害者を頭から否定することなく、加害者の異常さ、DV を受けていることの深刻さ、さらには自分の考え方の変化を試みることを促すことが重要である。

2-2 先行研究 1

ここで取り上げる恋人との関係満足度に焦点をあてた論文では、3 件のうち 2 件において関係満足度の高さやデート DV との関連が指摘されており、被害・加害経験者の満足度は低いことが示されている（西岡・小牧、2008；上野ら、2011）。また、共依存の高さ（野口、2009）、束縛の高さ（西岡・小牧、2009）、独占欲など激しい恋愛意識としての Mania の高さ（赤澤ら、2011）など、当事者の関係への過剰なめり込みがデート DV の被害や加害と関連しているこ

とが明らかになっている。さらに、当事者間の不均衡な関係性や両者の勢力の差（赤澤ら、2011；岡本、2013）など、二者間におけるバランスの悪さもデート DV 被害・加害に関連していることが示唆されている（赤澤、2016）。

また（山下、2009）は、身体的な暴力や性的な暴力は、身体に明確な傷をあたえるが、より重要なのは「愛する人に暴力を振られた」という事実であり、交際相手への信頼や愛情の崩壊が問題であると主張する。このことは、DV 被害者が「自身が被害者であることを認めない」という事象からも理解できる（山下、2009）。

さらに、男性は攻撃性が高く（秦、1990）DV 的傾向（性役割における男尊女卑の考え、性の優位性、支配性に関連した項目）も強くそれに比べ、女性は自己評価不安が高い（藤田、米澤、2009）。これらから恋人・夫婦関係といった少なからずお互いに依存しあった深い関係によって DV が生じるが、被害者はその状況を認められず、逃げる事が出来ないのではないかと考えられる。または、そもそも他人への信頼度、依存度が高いため離れたくてもなかなか決心がつかず関係を続けてしまうという可能性もある。これを検討するために以下では対人依存に関する研究についてレビューする。

2-3 先行研究 2

西川（2003）は依存行動に関して、抑制の側面は表出の側面と比べて状況要因等による影響が少なく安定していること、親への依存や友人への道具的な依存の表出は抑制の側面と比べると状況依存的で、状況的要因によって影響されることを示唆している。また、親、友人を問わず全般的に依存表出の機会が多い者は自尊感情が低く、自己効力感や対人適応感も低い傾向がある（西川、2003）。さらに、依存欲求が高い人は自己や他者への信頼感が高く、自己信頼感の高い女性は、自分が拒否されるのではないかと懸念が低いために他者へ頼ることへの躊躇が少なく、情緒的依存欲求も高くなる（竹澤・小玉、2004）。さらに、依存欲求を持つということは、外的適応が高まり、他者に対して肯定的な感情を抱くことにつながると考えられ、したがって依存表出行動を取ることが多くなれば、友人に対する肯定感情も高まる（藤川、2016）。

以上をまとめると、依存欲求の高い人は自己信頼感、他者信頼感が共に高い。また、一度他者に依存して受け入れても

らうと相手に肯定的な感情を持ちやすい。

2-3 仮説

上記までの議論から以下の仮説が導出される。

仮説

「依存欲求が高い人は、DVによって自己信頼感が低下する。」

「依存欲求が低い人は、DVによって自己信頼感が変化しない。」

つまり DV 加害者から被害者が逃げられない一番の要因は依存欲求が高い人が DV を受けることで自己信頼感が低下し、残った他者信頼感により加害者を切り捨てることが出来ないからであると予測される。

次章では上記仮説について検証していく。

第3章 実証方法

本研究では WEB 調査によって 20~60 歳までの男女 (DV 被害の経験者を含む) 50 名にアンケートを実施する。

回答者にはセンシティブな内容の質問であることに同意を得た方に限られ、全て匿名で行う。また、法律上 DV と定義される行為、またはそれに近い行為を 1 回以上受けたことがある方に回答を求めた。その回答者に対人依存の度合いを測る質問を 4 問、DV を受けることの自己信頼感への影響を測る質問を 6 問、の計 10 問の質問に回答してもらった。

対人依存度を測る質問で依存性が高いか低いかを分類し、また自己信頼感を測る質問で対人依存の傾向が高い人、低い人の特性を明らかにした。具体的には、質問ごとに「はい」なら 1 点、「いいえ」なら 0 点 (※問 9, 10 は各 5 点) とし、その点数による相関関係を見た。対人依存性の高低の基準としては、Q1 の点数の合計が 2 点以上なら対人依存性が高いとする。また、Q2 の問 1~4 では合計が 2 点以上なら DV を受けることで自己信頼感が低くなっていると考えられる。さらに、今回は対人依存性の低い場合の相関も見つかるため、Q1 の問 1~4 で各「いいえ」の数を 1 点として 2 点以上ある人は依存性が低いとする。これは私独自の基準である。私は Q1 の合計点数が高い人は Q2 の問 1~4 の合計点数が高くなる。さらに、Q1 で「いいえ」の点数が高い人は Q2 の問 5, 6 合計点数が高くなると推測する。

第4章 結果

4-1 依存欲求と自己信頼感の相関

t-検定: 一对の標本による平均の検定		
	Q1 の合計点数	Q2 の問 1~4 の合計点数
平均	2.571	2.142
分散	0.571	1.208
観測数	14	14
ピアソン相関	0.449	
仮説平均との差異	0	
自由度	13	
t	1.577	
P(T<=t) 片側	0.069	
t 境界値 片側	1.770	
P(T<=t) 両側	0.138	
t 境界値 両側	2.160	

※表 1

表 1 は対人依存性が強い人と分類された人 (Q1 の問 1~4 の合計点数が 2 点以上の人、14 人) の Q2 の問 1~4 の合計点数との相関である。図のように正の相関が認められたが統計的に有意差ではない。

t-検定: 一对の標本による平均の検定		
	Q1 の「いいえ」の合計点数	Q2 の問 5, 6 の合計点数
平均	3.472	3.333
分散	0.256	14.285
観測数	36	36
ピアソン相関	0.049	
仮説平均との差異	0	
自由度	35	
t 値	0.219	
P(T<=t) 片側	0.413	
t 境界値 片側	1.689	
P(T<=t) 両側	0.827	
t 境界値 両側	2.030	

※表 2

表 2 は対人依存性が低いと分類された人 (Q1 の合計点数

が2点未満)のQ2の間5,6と合計点数との相関である。図のように相関が認められなかった。

4-2 追加検証 (グループの差の分析)

t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定		
	依存性の高い人のQ2の間1~4の合計点数	依存性の低い人のQ2の間1~4の合計点数
平均	2.142	1.027
分散	1.208	1.170
観測数	14	36
仮説平均との差異	0	
自由度	23	
t 値	3.234	
P(T<t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.713	
P(T<t) 両側	0.003	
t 境界値 両側	2.068	

※表3

表3より、依存性の高い人の方が低い人よりQ2の間1~4の合計点数の平均点が2倍以上高いことが分かる。これは統計的に有意である。

t-検定: 分散が等しくないと仮定した2標本による検定		
	依存性の高い人のQ2の間5,6の合計点数	依存性の低い人のQ2の間5,6の合計点数
平均	3.57	3.333
分散	17.032	14.285
観測数	14	36
仮説平均との差異	0	
自由度	22	
t 値	0.187	
P(T<t) 片側	0.426	
t 境界値 片側	1.717	
P(T<t) 両側	0.853	
t 境界値 両側	2.073	

※表4

表4により依存性の高い人の方が低い人よりQ2の間5,6の合計点数が若干高いことが分かった。しかしこれは統計的に有意ではない。

第5章 結論と今後の課題

本研究では、DVの容認と自己信頼感の低下との関係を検証するためにアンケート調査を実施し、その結果を分析した。分析の結果は、対人依存性の高さとDVを受けたことにより自己信頼感の低下することを示唆している。しかし、この結果は統計的に支持されるものではない。また、対人依存性の低さと自己信頼感の維持との相関も示されなかった。これらの結果は、本研究の仮説を支持するものではない。

しかし追加検証の結果、依存性の高さとDVによる自己信頼感の低下との間には統計的に有意な相関が示された。この結果は、本研究の仮説を支持するものである。

本研究は以下の点において限界を有する。第1に調査数(標本数)が少ない点である。この原因は物理的なものであり、今後は大規模な調査が必要である。

第2に質問内容のクオリティも十分ではなかったと考えられる。例えば、2択回答ではなく、4段階、5段階の回答を用意するべきであったかもしれない。これにより、より細かい分析結果を出すことができたのではないかと考えられる。これもまた今後の研究課題である。

第6章 引用・参考文献

警察庁「平成30年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について(詳細)」
内閣府(2013)配偶者からの暴力支援情報(http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/dv/index.html) (2020年2月10日)
藤田絵里子・米澤好史(2009)デートDVに影響を及ぼす諸要因の分析とDV被害認識の明確化による支援の試み 和歌山大学教育学部実践総合センター紀要、19、9-18.
赤澤淳子(2016)国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題 福山大学人間文化学部紀要、19、128-146.
山下匡将(2009)若者におけるデートDVに関する基礎的研究—大学生を対象としたイメージ調査の結果から— 名古屋学院大学論集社会科学篇 第46巻 第2号 161-

178.

- 米田弘枝 (2014) ドメスティック・バイオレンス被害者が被害を受けていくプロセスの検討 立正大学臨床心理学研究 第12号 23-31.
- 西岡敦子・小牧一裕 (2008) 「リプロダクティブ・ヘルツ/ライフ」に関する調査Ⅷ 国際研究論叢:大阪国際大学紀要、21、36-53.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子 (2011) 大学生の性に対する態度がデートDVに及ぼす影響 四天王寺大学紀要、53、111-122.
- 野口康彦 (2009) 大学生カップル間におけるデートDVと共存に関する一検討 山梨英和大学紀要、8、105-113.
- 西岡敦子・小牧一裕 (2009) 「リプロダクティブ・ヘルツ/ライフ」に関する調査Ⅷ第2報 国際研究論叢:大阪国際大学紀要、22、25-39.
- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 (2011) 衡平性の認知とデートDVとの関連 仁愛大学研究紀要:人間学部篇、10、11-23.
- 岡本亮樹 (2013) デートDVに及ぼすジェンダー・ロールとパワー・リレーションの影響 福山大学こころの康相談室紀要、7、9-17.
- 秦一士 (1990) 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究、61、227-234.
- 西川隆三 (2003) 対人依存行動の研究—対人依存の自己制御と自己意識、ソーシャルスキル、及び対人適応感との関係の検討— 帝塚山学院大学 人間文化学部年報、第5号 1-19.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究 52(3)、310-319.
- 藤川由佳里 (2016) 大学生における友人依存について—適応と主観的幸福との関連から— 龍谷大学大学院文学研究科紀要 (38)、107.

